

昭和55年度重要貝類等毒化点検調査 (要 約)

天野 勝三・尾坂 康・高橋 克成・三津谷 正・永峰 文洋・浜田 勝雄
尾鷲 政幸(青森県水産増殖センター)・安元 健・大島 泰克(東北大学
農学部食糧化学科食品衛生学講座)

この調査は、ムラサキイガイ、ホタテガイ等に蓄積する下痢性貝毒の発生原因を究明し、計画的な水産物の出荷、処理等を行うことにより、漁業経営の安定に資することを目的として実施したものである。

調 査 方 法

調査水域 青森県陸奥湾
調査期間 昭和55年4月から昭和56年3月まで
調査項目 漁場環境調査、プランクトン調査、貝毒調査……水産増殖センター
下痢性貝毒の分析、精製および化学的性状検討……東北大学

調 査 結 果

1. 今年度の海況は、夏から秋にかけての著しい低水温に特徴づけられ、例年より5℃以上も低温の時期があった。津軽暖流水の流入勢力は例年とは逆に、春と晩秋に比較的強く、夏に弱いという傾向が認められた。
2. ホタテガイに毒力が検出された期間内の20m層以深における水温・塩分の範囲は、青森定点では8～18℃、32.8～34.1%、野辺地定点では8～20℃、32.6～33.9%であった。
3. 今年度においても*D. fortii*の出現状況とホタテガイの毒力はよく対応した。
4. *D. fortii*の挙動、ブイロボットの観測、浅海定線調査結果より、湾内(西湾)においては、津軽暖流水の影響をより強く受けた水塊に本種が多く分布することがわかった。
5. *D. fortii*が津軽暖流水を起源としても、本種が高密度で存在するのは、低水温域(8～16℃)である。
6. 地まき漁場(20m以浅)の海底直上水にも*D. fortii*の存在する場合がある。
7. ホタテガイとムラサキイガイの毒力を同時・同深度採集貝と比較すると、ホタテガイの方が毒力が低い傾向にあった。
8. 麻ひ性貝毒は全く検出されなかった。
9. 下痢性貝毒の排出についての室内実験の結果では、初期にはかなり急激に減衰し、4～7日で毒力が半減した。

◇

詳細については、「昭和55年度重要貝類等毒化点検調査報告書 青森県 昭和56年3月」に報告済み。

10. *D. fortii* の出現状況とホタテガイの毒力変化は2～3日の短い間隔でも比較的よく一致した。
11. *D. fortii* の毒性試験から、試料採集時期、場所および採集時の細胞密度に関係なく、*D. fortii* は9,000～22,000細胞で1MUに相当する毒性をもっていることがわかった。
12. *D. fortii* の細胞中にムラサキガイの毒の主成分T-1が存在するのが確認され、また毒化二枚貝と同様、複数の有毒成分の存在が明らかになった。
13. 低毒力ホタテガイからの毒の抽出、精製法を開発した。
14. 昨年度に引き続き、T-1成分の化学構造の解明を試みた。